



建築設備技術遺産

認定第 21 号 初めて国産化された高級衛生金具類
(パイロット印高級衛生・暖房金具類)

管理者: いするの家西原脩三記念館

所有者: 株式会社西原

近代建築の黎明期、明治から大正にかけて使用された衛生陶器や衛生金具類のほとんどは欧米からの輸入品であった。衛生陶器については大正 3 年に初めて国産化が始まり、大正 6 年頃には日本のメーカーによる大量生産が開始された。しかし、それに用いられる衛生金具類の国産化は遅々として進まず、小規模メーカーによる流し用水栓、洗面器用の立水栓類などの製造が行われていたに過ぎず、依然として多くは輸入品に頼らざるを得ない状況であった。

早くから衛生金具類の国産化の必要性に気づいていた西原衛生工業所創始者西原脩三氏は、大正 13 年に国産化に賛同するテーテンス氏(建材社技師)、ヤンソン氏(衛生金具技術者)と協同で、東京市大森区に合資会社ヤンソン製作所を設立し「パイロット印高級衛生金具類」の生産を開始した。国産化の先駆けとなったこの金具類は、製造当初より品質面で高い評価を受け、帝国議会議事堂(現国会議事堂)を始め、東京海上ビル新館など昭和初期の著名な建築物に数多く採用された。

パイロット印衛生金具類は、衛生面が重視され、機能性・利便性を念頭においた多くの特長を有していたが、注目すべきことは、逆流防止機能をコンパクトに装備した大・小便器のフラッシュバルブ、混合水栓やハンドシャワーなど、機能面だけでなくデザイン面でも優れた製品を提供したことである。昭和 30 年代中ごろの都市ホテルの建設ラッシュ時には、銀座東急ホテル、東京ヒルトンホテル、ホテルオークラなどに採用され、各ホテルから評価されたばかりでなくホテルの利用客からも歓迎されたという。しかし昭和 40 年代、衛生陶器・同金具類ともに多品種大量生産時代に入り、手作りの高級感のあった「パイロット印」は惜しまれながらその使命を閉じた。

現在この金具類の一部は、軽井沢にある西原脩三記念館「いするの家」の展示室に当時の製品カタログ等の資料とともに展示・保管されている。大正時代から昭和にかけて、技術者自らが合資会社を起業し国産化に踏み切り、製造当初から高い評価を受けたばかりでなく、金具類に搭載された新機能の技術力、高級感あるデザイン力、さらに衛生設備業界に自力で普及させた業績は奇跡的ともいえ、建築設備技術遺産として正に相応しいものと判断する。



フラッシュバルブ



炊事流し用水栓



壁付紙巻器



高級衛生金具類展示
(西原脩三記念館)